

ドイツ労働史・労働運動史研究

相馬 保夫

はじめに

- 1 社会構造史と日常史
- 2 新しいアプローチ
 - (1) ジェンダー
 - (2) 人種・エスニシティ
 - (3) 文化と生活圏

まとめ

はじめに

ソ連・東欧の「現存する社会主義」体制の崩壊からおよそ十年、「歴史としての社会主義」(和田春樹)、「労働史の終焉？」(後述)が語られるようになってからもうだいぶ経つ。この間、再統一されたドイツでは、ドイツ民主共和国(DDR)の社会主義の清算が行われ、大学・研究所・史料館・図書館などの研究機関の整理・再編が進み、歴史研究の重点が移動すると同時に、労働史・労働運動史の研究状況も様変わりした⁽¹⁾。冷戦時代、東西にまたがる労働運動史家が毎年一堂に会したリンツ会議は、「労働・社会運動史家国際会議」へと名称を変更し、これまでよりも扱う領域を広げた⁽²⁾。

ドイツ史研究もまた新たな局面を迎えた。東西間のイデオロギー対立という対抗軸が消滅し、全体主義論的な独裁体制の比較が盛んに唱えられる一方、極右・ネオナチ・外国人排斥の擡頭、東西ドイツ間の格差の顕在化から、現代社会における失業・青年・教育問題、市民や市民社会、ナショ

(1) 中間報告として、相馬保夫「ベルリンからリンツへ 最近のヨーロッパ労働運動史研究事情」『大原社会問題研究所雑誌』423号(1994年2月)、46-51頁。

(2) 『リンツ会議ニュース』第15号(2000年5月)。リンツ会議30周年記念大会の総括、Ch. Schindler (Hrsg.), *Die Internationale der "Labour Historians" Stand und Perspektiven der Arbeiter/innen/geschichtsschreibung im 30. Jahr der ITH* (Wien, 1995)も参照。

ナリズムや人種主義・ホロコーストの問題への歴史的な問いかけが新たな課題となった。フーコーやポストモダン思想の影響は、社会構造史から日常史へ、ジェンダーや人種・エスニシティ、言説・表象など新しいアプローチの研究への流れをつくり、多角的な比較の観点からかつての「ドイツ特有の道」論への批判・再検討が進み、様々な方法が模索されるようになった。

ドイツ労働史・労働運動史研究は現在どうなっているのだろうか。ここでは、1980年代からの研究動向を近年目立っている全体的な傾向と方法に注目して概観することにしたい⁽³⁾。なお、労働者文化、ナチスと労働者に関する研究史については既発表の拙稿を、150周年を迎えた1848年革命の研究については増谷英樹氏の論考を参照されたい⁽⁴⁾。

1 社会構造史と日常史

アムステルダム社会史国際研究所が発行する雑誌『国際社会史評論』は、1993年の増刊号で「労働史の終焉？」と題する特集を組んだ。そこでは、1960～70年代に欧米で隆盛になった労働史(labour history)研究から、女性史・文化史・心性史・都市史などと連携した「労働の社会史」(social history of labour)へと研究が進展したにもかかわらず、主に外的要因(世界政治の変動、ソ連・東欧社会主義の崩壊、労働者階級政党の危機、労働の価値観の変質)によって労働史研究が守勢にあることに危機感が表明され、細分化された研究状況を統合する必要性が改めて説かれた⁽⁵⁾。

(3) 1980年代前半までの研究動向については、西川正雄・伊藤定良「労働者と労働運動 ドイツ、1860年代-1914年」西川正雄編『ドイツ史研究入門』(東京大学出版会、1984)、205-220頁。K. Tenfelde (Hrsg.), *Arbeiter und Arbeiterbewegung im Vergleich. Berichte zur internationalen historischen Forschung* (München, 1986)。1990年代半ばまでについては、G. Schildt, *Die Arbeiterschaft im 19. und 20. Jahrhundert* (München, 1996)。書誌として、*Bibliographie zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung* 各年版。シリーズものでは、1980年代に刊行が始まったG.A.リッター編「18世紀末以降のドイツ労働者・労働運動の歴史」(*Geschichte der Arbeiter und der Arbeiterbewegung in Deutschland seit dem Ende des 18. Jahrhunderts*, hrsg. von G. A. Ritter)(既刊7冊)、「20世紀ドイツ労働組合運動史史料集」(*Quellen zur Geschichte der deutschen Gewerkschaftsbewegung im 20. Jahrhundert*, hrsg. von S. Mielke/ H.Weber)(第11巻まで既刊)。その他、ボンンの社会民主党系フリードリヒ・エーベルト財団からは、反ナチ抵抗運動に関係する史料集(例えば、B. Stöber, *Berichte der Lage in Deutschland. Die Meldungen der Gruppe Neu Beginnen aus dem Dritten Reich 1933-1936* <Bonn, 1996>など)、戦後社会民主党幹部会の史料集(*Die SPD unter Kurt Schumacher und Erich Ollenhauer 1946-1963. Sitzungsprotokolle der Spitzengremien*, 9 Bde.)が刊行中である。

(4) 相馬保夫「ヴァイマル共和国の労働者文化 研究の現状」『大原社会問題研究所雑誌』391号(1991年6月)、1-19頁。同「ヨーロッパの労働者文化と労働運動 歴史研究への新たな挑戦」小沢弘明ほか『労働者文化と労働運動 ヨーロッパの歴史的経験』(木鐸社、1995)、7-16頁。同『ナチスの労働者統合政策 労働組合から労働戦線へ』平成8・9年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(1998年3月)「1 ナチスと労働者」。増谷英樹「150周年を迎えた1848/49年革命研究 ドイツの研究を中心に」『歴史評論』584号(1998年12月)、87-101頁。

(5) M. van der Linden, "Editorial," *The End of Labour History? International Review of Social History [IRSH]*, Supplement 1, Vol. 38 (1993), pp.1-3.

1970年代の西ドイツ「社会構造史」(Gesellschaftsgeschichte)を代表するユルゲン・コッカは、この問題提起を受け、ジェンダー・言説の歴史からの挑戦に、体系的な階級形成論に基づく労働者と労働運動の歴史の総合を対置し、英米の労働史研究との違いを浮き彫りにした。

コッカの構想は、一つは、労働者の「階級形成」論として、もう一つは、「市民社会における労働運動」論として展開されている⁽⁶⁾。前者は、経済決定論と距離をとりながら、社会・経済的に規定された階級状況とそこでの労働や従属、闘争の経験を出発点に、家族や社会生活に見られるプロレタリアの生活状況、文化・コミュニケーション・社会化の様相を論じ、最終段階として、そうした状況の結果現われる労働組合や相互扶助組織、政党を扱うものである。後者は、市民社会の成熟の度合から西欧とも東欧とも異なるドイツ労働運動の形成の特質を明らかにし、市民社会プロジェクトの実現に果たした社会民主主義労働運動の貢献を強調しようとする。ここでは、そのうちコッカの階級形成論をとりあげ、それに対する日常史の視点からの批判を見ていこう。

コッカの階級形成論は、1983年の著書を受けて1990年に刊行された「18世紀末以降のドイツ労働者・労働運動の歴史」第1巻、第2巻で詳細に展開された⁽⁷⁾。それによると、19世紀の第3四半期終わり(1875年)までにドイツ地域に起こった近代化の激動の中で身分社会が解体し、階級社会が形成された。賃労働が広範に成立し、伝統的な下層の大部分と小市民・農民中間層の一部から賃金労働者=労働者階級が形成され、特有の階級帰属意識が生まれた。そして、この時期の後半には、こうした階級形成の結果、抗議・ストライキ運動や共済金庫、協会、協同組合、労働組合、労働者政党という形で、賃金労働者が社会的中核となる労働運動が成立し、それは後に大衆運動に発展し、「ドイツ史の決定的な要因」となった。

こうしてコッカの議論は、社会・経済的に賃労働によって定義される「階級状態」(Klassenlage)を出発点にして、共通の利益・経験から共通の「階級アイデンティティ」(Klassenidentität)が生まれ、そこから集団的な連帯による「階級行動」(Klassenhandeln)が発展する、という基本的な構成になっている。そこでの主に社会・経済的な分析、とくに個々の労働者範疇についての詳細で周到な分析は高く評価されているが、個々の点には立ち入らない。ここで問題にしたいのはむしろ、コッカの社会構造史的方法に基づく全体構想に対する主に日常史の側からの批判についてである。

(6) J. Kocka, "New Trends in Labour Movement Historiography: A German Perspective," *IRSH*, Vol. 42/1 (1997), pp. 67-78; J. Kocka, "Arbeiterbewegung in der Bürgergesellschaft. Überlegungen zum deutschen Fall," *Geschichte und Gesellschaft [GG]*, Jg. 20/4 (1994), pp. 487-496. ドイツ市民・市民社会研究プロジェクトについては、J. コッカ編著『国際比較近代ドイツの市民 心性・文化・政治』望田幸男監訳(ミネルヴァ書房, 2000)。

(7) J. Kocka, *Lohnarbeit und Klassenbildung. Arbeiter und Arbeiterbewegung in Deutschland 1800-1875* (Berlin/Bonn, 1983); *Weder Stand noch Klasse. Unterschichten um 1800* (Berlin/Bonn, 1990); *Arbeitsverhältnisse und Arbeiterexistenzen. Grundlagen der Klassenbildung im 19. Jahrhundert* (Berlin/Bonn, 1990). ここでのまとめは、*Ibid.*, pp. 1-9. 参照、今井晋哉・藤田幸一郎「ドイツにおける労働者階級形成論 ユルゲン・コッカの近著を手がかりに」『社会経済史学』第60巻第6号(1995年2・3月), 61-85頁。コッカが書く予定の同シリーズ第3巻・第4巻は未完、第5巻は、G. A. Ritter/K. Tenfelde, *Arbeiter im Deutschen Kaiserreich 1871 bis 1914* (Berlin/Bonn, 1992)。

共通の階級的地位から共通の利害，行動・組織を説明しようとするこの方法に対し，民衆の日常的な経験を重視する日常史を主張して，民衆特有の感性（Eigen-Sinn）をキーワードに労働者研究を進めてきたアルフ・リュトケは反論する。賃金労働者が無数の従属関係におかれていることはたしかだ。だが，そうした状況の中で彼らは，自分たち特有の感性を生み出しうるような僅かばかりの時間と空間をなんとかやりくりして手に入れようとしてきた。労働者の具体的な実践と経験は，資本家や経営者・職長への従属によって一方的に規定されていたのではない。それは，職場で同僚を斥け距離をおいたり，上司の指示を無視してさぼったりというように，自己の生存を確保し自律的な行動と自己確認の機会を創造的に使おうとする社会的実践に裏づけられていた。リュトケによれば，社会構造に規定される労働者の従属が抵抗かという二者択一ではなく，それをこえた主体的な経験の「多様な層」こそが問われるべきであった⁽⁸⁾。

1980年代の初め，ミクロ・レヴェルの日常史研究が提起されたとき，それが社会と政治の全体構造を見失わせ，民衆の経験を絶対視するロマン主義的観念論につながると，啓蒙的な立場から痛烈な批判を浴びせたのは，コッカやヴェーラーら社会構造史の側であった。しかし，ドイツ再統一を挟んでこの20年間に，状況は逆転したかのようだ。欧米のジェンダー研究やポストモダン思想の影響，民衆の経験を重視するオーラル・ヒストリーや地域レヴェルのミクロ・ヒストリーの方法の一般化，そして「市民革命」としての東欧革命の経験などから，日常史的な問題関心はすっかり浸透し，社会構造史の側に立つ若手研究者もその例外ではない⁽⁹⁾。

コッカの19世紀階級形成史についていえば，それが全体の構造を重視するあまり，この間に蓄積された様々な地域・産業・職種の労働者・労働運動史研究の水準よりもむしろ後退しているかのような印象さえ与える。例えば，1848年から1860年代にかけての初期労働運動の中核となったのは，機械制大工場の近代的な賃金労働者というよりは，手工業的な訓練を受け職人氣質をひきずった男性の職人労働者であり，そうした構造は社会民主党系の労働運動が大衆化した後も引き継がれたことなどは今や定説化している。社会・経済的な規定よりも言説・文化や政治・社会の多様なネット

(8) A. Lütke, "Polymorphous Synchrony: German Industrial Workers and the Politics of Everyday Life", in: *The End of Labour History?*, pp.39-84. Cf. A. Lütke, "Einleitung: Was ist und wer treibt Alltagsgeschichte?", in: Idem (Hrsg.), *Alltagsgeschichte. Zur Rekonstruktion historischer Erfahrungen und Lebensweisen* (Frankfurt a.M./New York, 1989), pp.9-47; A. Lütke, *Eigen-Sinn. Fabrikalltag, Arbeitererfahrungen und Politik vom Kaiserreich bis in den Faschismus* (Hamburg, 1993); Berliner Geschichtswerkstatt (Hrsg.), *Alltagskultur, Subjektivität und Geschichte. Zur Theorie und Praxis von Alltagsgeschichte* (Münster, 1994).

(9) 参照，井上茂子「西ドイツにおけるナチ時代の日常史研究 背景・有効性・問題点」『東京大学教養学部教養学科紀要』第19号（1987年3月），19-37頁。山本秀行「方法としての日常生活 日常生活史・ミクロの歴史学・歴史人類学」竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』（有斐閣，1995），307-326頁。Th. Welskopp, "Klasse als Befindlichkeit? Vergleichende Arbeitergeschichte vor der kulturhistorischen Herausforderung," *Archiv für Sozialgeschichte[AfS]*, Bd. 38 (1998), pp. 301-336.

ワークの中で労働者や労働運動の歴史を考えるとというのが、80年代以降の研究で明らかにされたことであった⁽¹⁰⁾。そして、この20年間は、コッカらの「ドイツ特有の道」論ではなく、多様な比較の観点からヨーロッパ近代が抱える様々な問題点が浮き彫りにされ、同時に、ドイツ史の研究が国際的にもっと開かれたものになっていく過程でもあった⁽¹¹⁾。

2 新しいアプローチ

1970年代の欧米における「労働の社会史」の問題提起は、ドイツにおいても労働者の組織やイデオロギー、指導者に関する研究から、様々な地域・産業・職種についての労働者・労働運動史の研究へと重心を移動させた。1980年代以降、オーラル・ヒストリーや日常史、ポストモダン思想に由来する言説・表象分析の方法が、労働者・労働運動史研究にも導入され、ドイツでも英米系の研究者から刺激を受けて新しいアプローチの仕方が試みられるようになった。ソ連・東欧の社会主義体制の崩壊は、こうした傾向に拍車をかけたように見える。しかし、それは同時に、労働者の階級や組織を主体とした研究から、多彩な研究方法に基づく民衆の社会・文化・日常史への研究の拡散状況を招き、新しいアプローチに基づく労働者・労働運動史研究の組み替えや相対化が進んだ。ここでは、そのいくつかの様相を研究方法に着目して紹介することにしたい。

(1) ジェンダー

18～19世紀イギリス労働史に関するE. P. トムスンとステドマン-ジョーンズの古典的な研究を批判し、ジェンダーに基づく労働者階級の構築を言説分析の方法で明らかにしようとしたのは、ジョーン・スコットの『ジェンダーと歴史のポリティクス』(原著1988年)であった⁽¹²⁾。キャスリーン・キャンニングは、スコットに倣い、ヴィルヘルム期からヴァイマル期にかけての繊維工とその労働組合に関する事例研究から、ドイツの労働者階級形成史にジェンダーの視点が欠けていることを厳しく批判した⁽¹³⁾。

彼女によれば、従来の労働者階級形成論において家族・世帯・近隣関係の重要性が指摘されるようになったにもかかわらず、女性は不可視的な存在にとどまり、ジェンダー・エスニシティ・宗教のような「非階級的」区分の重要性が十分に認識されてこなかった。労働者階級の「理想型」とみなされてきたものは、労働運動史料のジェンダー化された言説と歴史家によるその無批判的な受容・再生産からきている。正規の徒弟修業訓練を経て比較的よい賃金で雇用されたプロテスタント

(10) 参照、相馬保夫「ヨーロッパの労働者世界とその運動」歴史学研究会編『講座世界史』第3巻(東京大学出版会、1995)、145-172頁、および労働者文化に関する拙稿。

(11) 参照、G. Eley (ed.), *Society, Culture, and the State in Germany 1870-1930* (Ann Arbor, 1996)。

(12) 邦訳、J. W. スコット『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳(平凡社、1992)。

(13) K. Canning, "Gender and the Politics of Class Formation: Rethinking German Labor History," *American Historical Review*, Vol. 97/3 (1992), pp. 736-768. Cf. K. Canning, *Languages of Labor and Gender. Female Factory Work in Germany, 1850-1914* (Ithaca/London, 1996)。

の男子熟練工が、長期的な職の安定に基づく職業意識（階級意識形成の前提）を発達させたのに対し、その対極にある女性工場労働者は、従順で安く雇われる若い不熟練工で、その一時的・臨時的な雇用形態から職業意識の形成が阻害された、というのがそれである。職場における生産の構造が、男性労働者の労働アイデンティティの形成に中心的な役割をはたし、そこから彼らは政治的・階級的意識を発達させた。他方、女性の労働アイデンティティと政治行動は、それとは異なり、生産点での経験、生産との関係ではなく、結婚と母性に基づくものとみなされた。キャニングは、このような矛盾した仮定を繊維労働者の事例の検証によって覆し、ジェンダー史の社会構造史への統合⁽¹⁴⁾ではなく、コッカの階級形成モデルの組み替えを主張した。

ドイツでは、女性史の立場から労働者・労働運動の歴史を扱った研究はかなり蓄積されているが、ジェンダー論の問題提起を受けた研究はまだそれほど多くないように見える。しかも、ジェンダー的視点をラディカルに主張するよりは、社会構造史や日常史と組み合わせ、言説・表象分析の方法もとりにいれて論じる方が受け入れられやすいようだ。

ヴァイマル期ハンプルク女性労働者の日常生活と社会的・政治的行動を、オーラル・ヒストリーの方法も用いて扱った大著『女性の日常と男性の政治』⁽¹⁵⁾を著したカレン・ハーゲマンも、「構造史と経験史の結合」を志している。彼女が扱った問題は多岐にわたり、とくに次の三点の解明が試みられた。

世帯・家族・職業生活における労働者女性の日常、経済的・社会的・政治的構造が日常生活に及ぼした変化。

労働者女性の日常経験と日常への対応、彼女たちの個人的・社会的な行動の余地、出身・社会的地位・教育・職業・年齢・家族状態などの要因および経済的・社会的・政治的改革の影響、社会行動の「特殊女性的な」形態。

労働者女性の解放にはたした労働運動への参加の意義、労働者組織の女性政策・女性活動が様々な、社会的地位や年齢・家族状態によって異なる要求と利害に対応したあり方。

ここには、地域の詳細な事例研究に基づき、様々な方法を模索しながらその総合を試みるという近年の傾向の一つが窺える。

言説分析をとりこみながら、社会的現実との接点を探ろうとする『社会史年報』のジェンダー特集⁽¹⁶⁾も、その例であろう。しかも、ジェンダーへの視点の転換は、生産点の職場とともに家族と世帯・近隣関係、衣食住などの日常生活や消費行動への注目、労働者・労働運動の歴史では扱われ

(14) 例として挙げられているのは、D.Wierling, "Alltagsgeschichte und Geschichte der Geschlechterbeziehungen. Über historische und historiographische Verhältnisse," in: A. Lüdtke (Hrsg.), *Alltagsgeschichte*, pp. 169-190.

(15) K. Hagemann, *Frauenalltag und Männerpolitik. Alltagsleben und gesellschaftliches Handeln von Arbeiterfrauen in der Weimarer Republik* (Bonn, 1990). とくに, "Einleitung," pp. 11-22.

(16) Rahmenthema >Geschlechterrollen und Geschlechterbeziehungen im 19. und 20. Jahrhundert<, *AfS*, Bd. 38 (1998), pp. 1-284.

にくかった食糧蜂起・物価暴動・街頭暴力などの民衆運動・社会運動の再検討⁽¹⁷⁾、さらに人種・エスニシティの問題との関連性へと視野を拡大することにも道を開いた。この特集では例えば、第一次世界大戦中のベルリンにおける消費者の抗議行動を題材に、「消費者」という用語を通じてのジェンダーの構築を扱った B. デイヴィス、ナチス占領下ポーランドで教育や政治に携わったドイツ人女性の報告記録から、彼女たちの人種的・植民地主義的眼差しに満ちた「東方生存圏」の体験が、同時に女性の主導権と行動のための「空間」の発見と結びついていることを明らかにした E. ハーベイ、第二次世界大戦後のドイツ人とユダヤ人難民をめぐる「トラウマ、記憶、母性」の言説からネーション/フォルクが再構築されていく様を検討し、ドイツ史の「脱ドイツ化」を志す A. グロスマンなどがそれにあたる。こうした研究は社会・文化史研究のとりあつかう範囲を広げるとともに、従来の労働者・労働運動史研究を相対化するものといえよう。

(2) 人種・エスニシティ

アメリカ合衆国の黒人史研究、イギリスのカルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズムの影響から欧米で近年めざましく展開された人種・エスニシティに関する研究は、ドイツでは、1980年代からのナチ人種主義・優生学史研究、1990年代に入ってから顕著なホロコースト・強制連行労働者史研究によって新たな次元に達した。だが、それらの研究で得られた視点をどのようにしてドイツ労働者・労働運動史研究に生かし、総合するののかという問題の探求は始まったばかりといってもよい。今のところ、それぞれの分野での研究が積み重ねられているのが現状といえよう。

戦争、民族・ナショナリズム、植民地の問題をめぐる社会主義者・マルクス主義者の理論的・実践的な認識については、同時代から議論が重ねられてきており、それに関する研究も1970年代までにはかなり進んだ⁽¹⁸⁾。だが、ドイツではユダヤ人問題や対スラブ認識のような形で現われる人種・エスニシティのような、政治的・史料的に扱いにくいようなテーマにとりくまれるようになったのは、比較的最近のことに属する。

工業化・資本主義化の波及に伴って生まれた出稼ぎや移民労働者・外国人労働者、とくにルール

(17) ドイツの民衆運動・社会運動・抗議行動史研究が、現代的視点から英・仏社会史研究への再接近を図っていることについては、G. Manfred, "Food Riots in Großbritannien, Frankreich und Deutschland. Anmerkungen zu neueren Forschungsergebnissen," *AfS*, Bd. 33 (1993), pp. 586-604; M. Schäfer, "Streiks Arbeitskämpfe Konfliktregelung. Neuerscheinungen zur historischen Arbeitskonfliktforschung," *AfS*, 34 (1994), pp. 411-428. Cf. M. Gailus/H. Volkmann (Hrsg.), *Der Kampf um das tägliche Brot. Nahrungsmangel, Versorgungspolitik und Protest 1770-1990* (Opladen, 1994); Th. Lindenberger, *Straßenpolitik. Zur Sozialgeschichte der öffentlichen Ordnung in Berlin 1900 bis 1914* (Bonn, 1995); M.-L. Ehls, *Protest und Propaganda. Demonstrationen in Berlin zur Zeit der Weimarer Republik* (Berlin/New York, 1997).

(18) 日本における代表的な研究として、西川正雄『第一次世界大戦と社会主義者たち』(岩波書店, 1989)。独語訳 M. Nishikawa, *Der Erste Weltkrieg und die Sozialisten* (Bremen, 1999)。最近の欧米の研究として、例えば、E.トラヴェルソ『マルクス主義とユダヤ問題 ある論争の歴史(1843-1943年)』宇京頼三訳(人文書院, 2000)(原著1990年)。

地方のポーランド人労働者や「第三帝国」の時代の強制連行労働者に関する研究は、1980年代に端緒がつけられた⁽¹⁹⁾。現在から見ても特筆すべきは、ナチ時代にルール地方に強制連行された外国人労働者についての記憶から、ドイツ国内における日常的次元での人種主義をえぐり出したウルリヒ・ヘルベルトの論文⁽²⁰⁾であろう。それによると、第二次世界大戦中にルール地方に強制連行された外国人労働者の数は、1944年末までに大都市では人口の四分の一、重要軍需産業では従業員の半数を占め、彼ら外国人労働者の日常は、多くの点で「急進的なアパルトヘイトを想起させる」ものであった。というのは、そこでは「ドイツ人労働者階級が一種の『下層の白人階級』に上昇し、それによって階級対立の爆薬から信管がはずされ、新たな下層階級に対する抑圧的な差別に方向がそらされた」のであった。このように、彼の研究は、1990年代に新たな段階に入ったこの方向の研究を先取りしていた。

ナチ時代の人種主義・ホロコースト・強制労働の理論と実態に関する研究は、この10年間に急速に進み、労働者・労働運動史研究との接点が生まれるようになった。反ユダヤ主義だけにとどまらないナチの広範囲な人種主義および社会政策とその関係については、ポイカートやパーリ/ヴィッパーマンらの研究⁽²¹⁾によって先鞭がつけられ、ナチ指導者と人種主義についての伝記的・思想史的研究や、優生学・優生思想、「安楽死」をめぐる国際的な研究と論争が飛躍的に進み、人種主義

(19) 例えば、K. J. Bade (Hrsg.), *Auswanderer Wanderarbeiter Gastarbeiter. Bevölkerung, Arbeitsmarkt und Wanderung in Deutschland seit der Mitte des 19. Jahrhunderts*, 2 Bde. (Ostfildern, 1984); U. Herbert, *Geschichte der Ausländerbeschäftigung in Deutschland 1880 bis 1980. Saisonarbeiter, Zwangsarbeiter, Gastarbeiter* (Berlin/Bonn, 1986). 柴田英樹「第二帝政期ドイツにおける外国人労働者」山田史郎・北村暁夫ほか『移民』(ミネルヴァ書房, 1998), 187-240頁。伊藤定良『異郷と故郷 ドイツ帝国主義とポーランド人』(東京大学出版会, 1987)。U. Herbert, *Fremdarbeiter. Politik und Praxis des "Ausländer-Einsatzes" in der Kriegswirtschaft des Dritten Reiches* (Berlin/Bonn, 1985)。矢野久「外国人労働者の強制連行・強制労働 1941/42年を中心に」井上茂子ほか『1939 ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』(同文館, 1989), 199-242頁。同「戦後西ドイツと外国人労働者」『大原社会問題研究所雑誌』474号(1998年5月), 1-24頁, ほかの同氏の一連の研究。

(20) U. Herbert, "Apartheid nebenan. Erinnerungen an die Fremdarbeiter im Ruhrgebiet," in: L. Niethammer (Hrsg.), "Die Jahre weiß man nicht, wo man die heute hinsetzen soll." *Faschismus-Erfahrungen im Ruhrgebiet. Lebensgeschichte und Sozialstruktur im Ruhrgebiet 1930 bis 1960*, Bd. 1 (Berlin/Bonn, 1983), pp. 233-266. 第二次世界大戦後占領下における日常的な人種主義の残響については, L. Niethammer, "Privat-Wirtschaft. Erinnerungsfragmente einer anderen Umerziehung," in: Idem (Hrsg.), "Hinterher merkt man, daß es richtig war, daß es schiefgegangen ist." *Nachkriegs-Erfahrungen im Ruhrgebiet. Lebensgeschichte und Sozialstruktur im Ruhrgebiet 1930 bis 1960*, Bd. 2 (Berlin/Bonn, 1983), pp. 22-34.

(21) D. ポイカート『ナチス・ドイツ ある近代の社会史』木村靖二・山本秀行訳(三元社, 1997)(原著1982年)。M. Burleigh/W. Wippermann, *The Racial State: Germany 1933-1945* (Cambridge/New York, 1991)。邦訳『人種主義国家ドイツ 1933-45』柴田敬二訳(刀水書房, 2001)。

政策とホロコーストの実態，とくにナチが占領した東欧・ロシア各地域での迫害と虐殺の実態が詳しく解明されるようになった⁽²²⁾。ここでの関連では，ヴァイマル期社会民主党の優生学思想を扱ったミヒャエル・シュヴァルツや川越修の研究⁽²³⁾，東部戦線に兵士として動員され，ユダヤ人狩りを行ったハンブルク労働者からなる警察部隊の反ユダヤ主義を扱い，論争になったブラウニングやゴールドハーゲンの研究⁽²⁴⁾，ナチ支配地域における強制労働の実態およびソ連における強制労働との比較に関する論集⁽²⁵⁾を挙げておこう。なお，社会民主党系労働運動における人種主義の表象については，相馬が労働者文化との関わりで触れている⁽²⁶⁾。総じて，この分野の研究は，これまで考えられなかった範囲にまで労働者・労働運動史研究の可能性を広げ，新しいアプローチの必要性を要請しているといえよう。

(3) 文化と生活圏

第二帝制期からヴァイマル期にかけての労働者文化・労働運動文化に関しては，その後，地域レベル，とくにザクセンなど旧DDR地域についての研究が進んだ⁽²⁷⁾。組織研究として，労働者協同組合のほか，労働者合唱団や旅行者協会「自然の友」などヴァイマル期社会民主党系の文化・余

(22) ヘルベルト教授の来日公演「ホロコースト研究の諸傾向」を参照。

(23) M. Schwartz, *Sozialistische Eugenik. Eugenische Sozialtechnologien in Debatten und Politik der deutschen Sozialdemokratie 1890-1933* (Bonn, 1995). 川越修「国民化する身体　ドイツにおける社会衛生学の誕生」『思想』884号(1998年2月), 5-27頁, ほかの同氏の一連の研究。

(24) Ch. ブラウニング『普通の人びと　ホロコーストと第101警察予備大隊』谷喬夫訳(筑摩書房, 1997)。D. J. Goldhagen, *Hitler's Willing Executioners. Ordinary Germans and the Holocaust* (New York, 1996)。他に，兵士としての労働者を扱った，O. Bartov, "The Missing Years. German Workers, German Soldiers," in: D. F. Crew (ed.), *Nazism and German Society, 1933-1945* (London/New York, 1994), pp.41-66. Cf. O. Bartov, *Hitlers Wehrmacht. Soldaten, Fanatismus und die Brutalisierung des Krieges* (Reinbek bei Hamburg, 1999)。

(25) U. Herbert (Hrsg.), *Europa und der >Reichseinsatz<. Ausländische Zivilarbeiter, Kriegsgefangene und KZ-Häftlinge in Deutschland 1938-1945* (Essen, 1991); D. Dahlmann / G. Hirschfeld (Hrsg.), *Lager, Zwangsarbeit, Vertreibung und Deportation. Dimensionen der Massenverbrechen in der Sowjetunion und in Deutschland 1933 bis 1945* (Essen, 1999); R. Spanjer/D. Oudesluijs/J. Meijer (Hrsg.), *Zur Arbeit gezwungen: Zwangsarbeit in Deutschland 1940-1945* (Bremen, 1999)。

(26) 相馬保夫「視覚的表象と労働者文化　ドイツ：1890-1933年」『歴史学研究』増刊号, 729号(1999年10月), 161-168頁。

(27) 例えば, F. Heidenreich, *Arbeiterkulturbewegung und Sozialdemokratie in Sachsen vor 1933* (Köln/Weimar/Wien, 1995); Th. Adam, *Arbeitermilieu und Arbeiterbewegung in Leipzig 1880 bis 1933* (Köln/Weimar/Wien, 1999)。

暇組織について新しい研究が出版された⁽²⁸⁾。労働者の生活の場であり、ヴァイマル期に政治論争となった住宅をめぐる問題、社会民主党が関わった1920年代の「新しい住まい」の意義については、日本でも一定の成果が出された⁽²⁹⁾。また、ヴァイマル期から第二次世界大戦後にかけてのアメリカニズム、大衆消費文化が現代の問題として注目されている⁽³⁰⁾。このように、労働者文化をめぐるのは依然として活発に研究が進んでおり、今後の課題は、言説・表象やジェンダー・人種・エスニシティの研究手法との接合をいかにして図っていくかであろう。

一方、このところ議論が再燃しているのは、ヴァイマル期からナチ期、さらには第二次世界大戦後の両ドイツへと通ずる労働者の生活圏の問題をめぐることである。ここで生活圏と訳したミリューとは、レプジウス (M. R. Lepsius) の定義では、「社会文化的ミリュー」、つまり宗派・地域・経済・文化・階層などいくつかの構造的次元の一致によって形成され、規定される「社会的・文化的形成体」のことをさす。ドイツでは第二帝制期に、保守主義・自由主義・カトリック・社会主義の四つのミリューが形成され、その政治的行動委員会としての世界観政党がヴァイマル社会を分断・両極化し、責任意識ある民主政治の実現を妨げたとされる。戦後西ドイツ社会を基準にしたこの批判的視点は、選挙統計分析による政党研究に受け継がれ、第二帝制からヴァイマル期にかけての政党配置の連続性、戦後西ドイツとの断絶が主張された。ヴァイマル期社会民主党の国民政党化をめぐる議論や、ナチ党の進出に対する社会主義ミリュー、カトリック・ミリューの抵抗力に関する議論でも、特定地域・特定集団との結合を説明する概念として社会文化的ミリューの概念が用いられた⁽³¹⁾。

これに対し、ミリュー概念を、労働者の労働と生活の全体をとりまく場、そこでの生活やコミュニケーションのあり方、組織との関係などに関連する包括的な概念と理解するならば、労働者の生

(28) K. Novy u.a. (Hrsg.), *Anders Leben. Geschichte und Zukunft der Genossenschaftskultur. Beispiele aus Nordrhein-Westfalen* (Berlin/Bonn, 1985) ; U. Kurzer, *Nationalsozialismus und Konsumgenossenschaften. Gleichschaltung, Sanierung und Teilliquidation zwischen 1933 und 1936* (Pfaffenweiler, 1997) . P. レーシェ編のシリーズとして、F. Walter, *Sozialistische Akademiker- und Intellektuellenorganisationen in der Weimarer Republik* (Bonn, 1990) ; F. Walter /V. Denecke/C.Regin, *Sozialistische Gesundheits- und Lebensreformverbände* (Bonn, 1991) ; D. Klenke/ P. Lilje/ F. Walter, *Arbeitersänger und Volksbühnen in der Weimarer Republik* (Bonn, 1992) ; S. Heimann/F. Walter, *Freidenkerische und religiös-sozialistische Gruppierungen* (Bonn, 1993) .

(29) 後藤俊明『ドイツ住宅問題の政治社会史 ヴァイマル社会国家と中間層』(未来社, 1999)。相馬保夫「『賃貸兵舎』から『新しい住まい』へ 都市計画・住宅建設のパラダイム転換: 1920年代ベルリン」田中邦夫編『パラダイム論の諸相』(鹿児島大学法文学部, 1995), 179-215頁。同「ヴァイマル期ベルリンにおける都市計画・住宅建設と労働者文化」前掲『労働者文化と労働運動』, 59-149頁。ドイツにおける研究では、例えば、A. von Saldern, *Häuserleben. Zur Geschichte städtischen Arbeiterwohnens vom Kaiserreich bis heute* (Bonn, 1995) ; G. Kuhn, *Wohnkultur und kommunale Wohnungspolitik in Frankfurt am Mein 1880 bis 1930. Auf dem Wege zu einer pluralen Gesellschaft der Individuen* (Bonn, 1998) .

(30) 参照、相馬保夫「アメリカニズムとヴァイマル期労働者文化 フォーディズムと社会主義」増谷英樹・伊藤定良編『越境する文化と国民統合』(東京大学出版会, 1998), 57-78頁。

(31) 相馬「ヴァイマル共和国の労働者文化」、同『ナチスの労働者統合政策』を参照。

活と組織，順応と抵抗を日常史的な観点から問い直し，組織を中心とした労働運動・労働者文化史研究を相対化することが可能となるのではないだろうか。最近のヴァイマル期共産党に関する論争やナチ時代の密告社会に関する研究⁽³²⁾は，ミリュー概念の重要性を改めて浮き彫りにした。労働者ミリューが変容・解体したのか，それとも抵抗の拠点となったのかを問うことは，ナチ体制への統合と抵抗に関する研究を総合する有力な見方となる⁽³³⁾し，再統一後めざましいソ連占領地区(SBZ) / DDR に関する研究⁽³⁴⁾をふまえてヴァイマル・ナチ期を戦後史とつなぎ，戦後西ドイツ社会を基準にした直線的な近代化という歴史理解を相対化する視点が得られるだろう。その際，従来よりもいっそうきめ細かく比較を進めていく必要があることは，第三帝国期における労働者ミリューの差異化と分裂を示すハンブルクの港湾労働者と造船労働者に関する対照的な事例研究⁽³⁵⁾，独裁体制の比較論から距離を置いてSBZ / DDRの労働者の労働と日常を西側の労働者のそれと照らしあわせながら探ろうとする最近の論集⁽³⁶⁾が示している。

さらに，社会主義労働者ミリューとの関連で保守主義，自由主義やカトリックのミリューを比較考察する必要がある。最近の論文では，第二帝制期に部分的に形成され，第一次世界大戦後に危機に対する自己防衛として濃密化した保守主義と自由主義のミリューが，ナチ党の温床となるとともに抵抗の避難所ともなり，ナチ時代に存続・強化された保守主義とカトリックのミリューが戦後保守政党(キリスト教民主同盟)の出発点となったと評されている⁽³⁷⁾。単純なミリューの変容・解

⁽³²⁾ K.-M. Mallmann, *Kommunisten in der Weimarer Republik. Sozialgeschichte einer revolutionären Bewegung* (Darmstadt, 1996); Idem, "Milieu, Radikalismus und lokale Gesellschaft. Zur Sozialgeschichte des Kommunismus in der Weimarer Republik," *GG*, 21/1 (1995), pp. 5-31. マルマンの著書をめぐる批判と応答 (*Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg. 45/3 (1997), pp. 449-466; Jg. 47/3 (1999), pp. 401-415), G. Paul/K.-M. Mallmann (Hrsg.), *Die Gestapo Mythos und Realität* (Darmstadt, 1996) .

⁽³³⁾ D. Schmiechen-Ackermann (Hrsg.), *Anpassung, Verweigerung, Widerstand. Soziale Milieus, Politische Kultur und der Widerstand gegen den Nationalsozialismus in Deutschland im regionalen Vergleich* (Berlin, 1997); Idem, *Nationalsozialismus und Arbeitermilieus. Der nationalsozialistische Angriff auf die proletarischen Wohnquartiere und die Reaktion in den sozialistischen Vereinen* (Bonn, 1998); M. Schneider, *Unterm Hakenkreuz. Arbeiter und Arbeiterbewegung 1933 bis 1939* (Bonn, 1999) .

⁽³⁴⁾ 参照, B. Bouvier, "Forschungen zur DDR-Gechichte. Aspekte ihrer Konjunktur und Unübersichtlichkeit," *AfS*, Bd. 38 (1998), pp. 555-590.

⁽³⁵⁾ K. Weinbauer, "Arbeitsfrieden durch Arbeitsleistung? Umstrukturierung der Hafendarbeit 1933-1939"; L. Eiber, "Arbeiteropposition auf Hamburger Werften," in: A. Ebbinghaus/ K. Linne (Hrsg.), *Kein abgeschlossenes Kapitel: Hamburg im >Dritten Reich<* (Hamburg, 1997), pp.411-433, 434-457.

⁽³⁶⁾ P. Hübner/K. Tenfelde (Hrsg.), *Arbeiter in der SBZ-DDR* (Essen, 1999); Th. Lindenberger (Hrsg.), *Herrschaft und Eigen-Sinn in der Diktatur. Studien zur Gesellschaftsgeschichte der DDR* (Köln/Weimar/ Wien, 1999). 日本における研究として，星乃治彦『社会主義国における民衆の歴史 1953年6月17日東ドイツの情景』(法律文化社，1994)ほかの同氏の研究。

⁽³⁷⁾ P. Lösche/F. Walter, "Katholiken, Konservative und Liberale: Milieus und Lebenswelten bürgerlicher Parteien in Deutschland während des 20. Jahrhunderts," *GG*, Jg. 26/3 (2000), pp.471-492.

体論とは異なるパースペクティブがここに示されている。また、ホロコースト研究の深化する中で、民衆の日常的な反ユダヤ主義に関する研究も進み、その関連で、ユダヤ系の人たちのまとめりと分裂のあり方、つまりユダヤ系ミリューとでもいうべきドイツ人との関係の諸相によりよく探索のメスが入るようになった⁽³⁸⁾。すでに一定の成果が出されている外国人労働者との関係と並んで、このユダヤ系ミリューとの関係を考えることが、ドイツ人に限定されたミリューに関するパラダイムを脱構築することを可能にするかもしれない。ここに、今後の重要な研究課題があろう。

まとめ

以上、ドイツ労働史・労働運動史に関する最近の研究動向を全体的な傾向と方法に着目して概観してきた。簡潔にまとめておこう。

ドイツ再統一は、マルクス主義 対 近代化論・全体主義論、あるいは共産主義 対 社会民主主義という不毛なイデオロギー的対立を消滅させ、社会主義への関心を熱い政治的な論争の的から冷静な歴史的・社会科学的な研究の対象にした。DDR にあった史料の解禁によって研究テーマが広がるとともに、新しいアプローチに開かれた研究が可能になった。福祉国家論、フェミニズム理論、ポストモダン思想など欧米の最新理論や英米仏の社会史・労働史・社会運動史の研究、カルチュラル・スタディズの成果などをとりこんで、テーマ・方法の多元性がいっそう進み、社会構造史に日常史の方法を組み合わせる政治社会史から社会文化史への方向が示されたのが、この20年間であったといえよう。しかし、それは同時に、テーマと方法の拡散状況を総合し、ナショナルな言説をたちあげることなく開かれた研究を模索することが、歴史研究に新たな課題となって突きつけられたことをも意味していた。

(そうま・やすお 東京外国語大学外国語学部教授)

⁽³⁸⁾ 参照、Rahmenthema >Juden in Politik und Gesellschaft der 1920er Jahren<, *AfS*, Bd. 37 (1997); W. Benz/A. Paucker/P. Pulzer (Hrsg.), *Jüdisches Leben in der Weimarer Republik* (Tübingen, 1998); D. Walter, *Antisemitische Kriminalität und Gewalt. Judenfeindschaft in der Weimarer Republik* (Bonn, 1999)。